

# ティラウラコットの現状を考える

則 武 海 源

## 1. 問題の所在

仏教を興したゴータマブッダは、出家するまでの29年間を釈迦族の居城であるカピラヴァストゥで過ごしたと伝典では伝えられ、釈尊出家の動機（四門出遊）の地であるカピラヴァストゥ（Kapilavastu）の所在地問題は、1世紀以上にわたり諸学者により論議されている仏教史上の重要な課題である。ティラウラコット問題とは言うまでもなく本遺跡がカピラヴァストゥであるか否かという問題である。

立正大学によるティラウラコット発掘事業は1966年の予備調査から10年余にわたり実施され、中村瑞隆（仏教学）を中心に、久保常晴（考古学）・坂詰秀一（考古学）・大村肇（地理学）・高村弘毅（地理学）等多くの先学が参画し、日本からネパールに大規模な海外調査団を派遣するという一大プロジェクトであった。<sup>(1)</sup>

当時の発掘調査の報告書は既に公刊され、その後の調査隊の基礎資料となっている。<sup>(2)</sup> 当時の発掘方法が現在の発掘技術・調査方法と異なる点や、現在の国際的な保存修復の概念・技術・基準の相違などから指摘される点も見られるが、いずれにしても大きな成果を上げたことは周知の通りである。

先行研究の経緯を列举すると以下の通りとなる。

- ①1896年 A. Fuhrer ニガリ・サガル（Nigali Sagar）池辺でアショカ・ピラ発見<sup>(3)</sup>
- ②1896年 L. A. Waddell ゴーティハワ（Gotihawa）発掘、ティラウラコット東門発掘<sup>(4)</sup>
- ③1897年 A. Fuhrer サガルハワ（Sagarhawa）発掘
- ④1898年 W.C.Peppe ピプラハワ（Piprahawa）発掘 舍利容器発見（舍利容器の訳文には相違「仏陀の舍利容器」or「釈迦族の人々の舍利」）
- ⑤1899年 P. C. Mukherji カピラ城調査 ティラウラコット説<sup>(5)</sup>
- ⑥1901年 Vincent A. Smith ティラウラコット説<sup>(6)</sup>
- ⑦1906年 W. Vost ティラウラコット説<sup>(7)</sup>
- ⑧1917年 岡教邃 ティラウラコット・拘那含仏本生城説<sup>(8)</sup>
- ⑨1959年 Devala Mitra ガンワリア（Ganwalia）説<sup>(9)</sup>

⑩1967～72年 T. N. Mishra ティラウラコット発掘<sup>(10)</sup>

⑪1972～74年 B. K. Rijal ティラウラコット発掘<sup>(11)</sup>

⑫1987～98年 K. M. Srivastava ピプラハワ再発掘 舍利容器・31シーリング発見<sup>(12)</sup>

現在、このカピラヴァストゥ所在問題は上記④の William.C.Peppe により発掘され舍利容器が発見され、さらに⑫で舍利容器やシーリングが確認されたインド領ピプラハワ (Piprahawa) 説と、⑤の Purna Chandra Mukherji により『大唐西域記』などの史料をもとに、ルンビニー、サガルハワ、ニガリ・サガルの位置関係や記述に残る地理的特徴から推定されたネパール領ティラウラコット (Tilaura kot) の2説が有力視されている。

現在、この2遺跡は国境を隔てて隣り合わせの位置関係にあり、以前は同じ国家、地域という見方もできる。ピプラハワは仏塔と僧院跡のガンワリア遺跡による、仏塔+僧院の構造であるのに対し、ティラウラコットは『法顕伝』や『西域記』の記述による、川の流域・王城跡構造をもち、周辺域の仏塔・僧院跡やアショカ・ピラの存在、地理的特徴を精査しカピラヴァストゥ (Kapilavastu) 跡とみているのである。

立正隊を率いた中村瑞隆はその著の中で、このティラウラコット説とピプラハワ説の違いを紹介している<sup>(13)</sup>。

既にティラウラコット遺跡発掘の現状と課題については日本宗教学会第78回学術大会(2019/09/14)並びに中外日報(2020/06/10)において報告しているが、本論はこれらの問題を再度考察し、近年、ダラム大学 Robin.Coningham を中心として UNESCO、JFIT 主導のもと進められているティラウラコットの発掘調査の現状を踏まえて小考するものである。

## 2. 『高僧法顕伝』『大唐西域記』によるカピラヴァストゥの記述

このカピラ城は5世紀の法顕の『高僧法顕伝』では「迦維羅衛城」、7世紀の玄奘の『大唐西域記』では「劫比羅伐窣堵」と記述され、その所在をめぐってはアショカ・ピラの所在やルンビニー等の遺跡との距離などの問題とあわせてこれまで諸説が展開されてきた。改めてこの2史料を検証してみる。

### 2-1 『高僧法顕伝』<sup>(14)</sup>に以下の通りの記述がある。

此東行減一由延到迦維羅衛城 城中都無王民甚丘荒 止有衆僧民戸數十家而已 白淨王故宮處 作太子母形像 及太子乘白象入母胎時 太子出城東門見病人 迴車還處皆起塔 阿夷相太子處 與難陀等撲象搗射處 箭東南去三十里入地令泉水出 後世人治作井令人飲 佛得道還見父王處 五百釋子出家向優波離作 禮地六種震動處 佛爲諸天說法四天王等 守四門父王不得入處 佛在尼拘律樹下東 向坐大愛道布施佛僧伽梨處 此樹猶

在 瑠璃王殺釋種 釋種死盡得須陀洹立塔今亦在 城東北數里有王田太子坐樹下觀耕者  
處 城東五十里有王園 園名論民 夫人入池洗浴出池 北岸二十步舉手攀樹枝東向生太  
子 太子墮地行七步 二龍王浴太子 身浴處遂作井 及上洗浴池 今衆僧常取飲之 〈中  
略〉 迦維羅衛國大空荒人民希疎道路怖畏 白象師子不可妄行

〈ここより東行すること一由延たらずで迦維羅衛城（カピラヴァストゥ）に到る。この城  
中にすべての王民なく甚だ荒廢している。衆僧と民戸が数十家あるのみである。白淨王の  
故宮の処に太子の母形像が作ってあり、および太子が白象に乗り母の胎内に入る時の像が  
ある。太子が城の東門を出て病人を見て車を回し還った処にみな塔が立ててある。阿夷が  
太子の相を見た処、難陀と象を撲ち挿射した処がある。箭は東南方三十里の地に入り泉水  
が出る。後世の人、治して井戸を作り行人に飲ませる。仏が得道して還り父王に会われた  
処、五百人の釈迦族の者が出家して優波離に向かい礼をなし、地が六種に震動した処、仏  
が諸天のため法を説き四天王らが四門を守り、父王が入ることを得なかった処、仏が尼拘  
律樹（榕樹）の下で東向きに坐り、大愛道が仏に僧伽梨を布施した処、この樹はいまなお  
ある。瑠璃王が釈迦の種族を殺し、釈迦の種族が死んでことごとく須陀洹を得た処にも塔  
を立ていまもまたある。城の東北數里に王田があり、太子が樹下に耕者を見た処である。  
城の東五十里に王園あり。園名を論民という。夫人は池に入りて洗浴し、北岸に二十歩、  
手をあげて樹枝をつかみ、東を向いて太子を生んだ。太子は地に落ち七歩行き、二龍王が  
太子に水を浴びせ身体を沐浴させた処に井戸を作った。〈中略〉 迦維羅衛國は非常に荒れは  
て人民は稀で、道路は粗末で恐ろしく白象や師子が現われ、みだりに行くべきではない。〉

このように、釈尊滅後800年後の法顯のみたカピラヴァストゥの荒廢きわまりない様子が記  
されているが、仏説・伝承のある各所には仏塔が建てられ、カピラヴァストゥから東へ五十  
里でルンビニーに達すると記されている。法顯と玄奘では約200年の差があり、その記述内容  
にも異同がある。よって次に『大唐西域記』を見てみる。

2-2 『大唐西域記』<sup>(15)</sup>では『法顯伝』にくらべカピラヴァストゥのことが詳細に記されてい  
る。伝承・伝説の部分を省き、遺構の記述のみを列挙する。

劫比羅伐窣堵國 周四千餘里 空城十數荒蕪已甚 王城頽圯周量不詳 其内宮城周十四  
五里 壘輒而成基跡峻固 空荒久遠人里稀曠

〈劫比羅伐窣堵（カピラヴァストゥ）國、周囲は四千餘里なり。空城は十数にして荒廢は  
すでに甚だしい。王城は頽れ周囲の量も不詳。そのうち宮城は周囲十四、五里。煉瓦を積  
みあげ基礎とし堅固である。空しく荒れて久しく人の住む所も稀である〉

伽藍故基千有餘所 而宮城之側有一伽藍 僧徒三千餘人 習學小乘正量部教 天祠兩所  
異道雜居

〈伽藍はゆえに基礎が千余カ所あり。宮城の側に一伽藍あり。僧徒は三千余人。小乗の正量部の教えを習学している。天祠は二カ所。異道（の人々）が雑居している。〉

宮城内有故基 淨飯王正殿也 上建精舍中作王像 其側不遠有故基 摩訶摩耶唐言大術  
夫人寢殿也 上建精舍 中作夫人之像 其側精舍是釋迦菩薩降神母胎處 中作菩薩降神  
之像

〈宮城の中に古い基礎がある。淨飯王の正殿なり。その上に精舎を建て王の像が作られている。その側の遠くない所に古い基礎がある。摩訶摩耶（唐で大術夫人と言う）の寢殿なり。（その）上に精舎を建て中に夫人の像が作られている。その側の精舎は釈迦菩薩が母の胎内に降神された処なり。中に菩薩降神の像がある。〉

菩薩降神東北有窰堵波 阿私多仙相太子處

〈菩薩降神の東北に窰堵波あり。阿私多仙が太子を觀相した処なり。〉

城南門有窰堵波 是太子與諸釋角力擲象之處 （中略） 其象墮地爲大深阬 土俗相傳爲  
象墮阬也 其側精舍中作太子像其側又有精舍 太子妃寢宮也 中作耶輸陀羅并有羅怛羅  
像 宮側精舍作受業之像 太子學堂故基也

〈城の南門に窰堵波あり。太子が諸釈迦族と角力し象を擲げた処なり。（中略） その象が地に墮ち大深坑ができ、土地の俗説では象墮坑と相伝されている。その側の精舎の中に太子の像が作られており、その側にまた精舎がある。太子妃の寢宮なり。中に耶輸陀羅ならびに羅怛羅の像あり。寢宮の側の精舎は（学）業を受けられる像が作られ、太子の学堂の古い基礎なり。〉

東南隅有一精舍 中作太子乘白馬凌虛之像 是踰城處也 城四門外各有精舍 中作老病  
死人沙門之像 是太子遊觀觀相增懷 深厭塵俗 於此感悟 命僕迴駕

〈東南隅に一つの精舎あり。中に太子が白馬に乗り虚空を凌ぎ駆ける像なり。これは踰城の処なり。城の四門の外にはそれぞれ精舎がある。中に老・病・死の人や沙門の像が作られている。これは太子が遊観され、人々の姿を見て感懷を増し、深く俗塵を厭われ、ここに於いて悟りを感じ、僕者に引き還すよう命じられた。〉

城南行五十餘里至故城 有窣堵波 是賢劫中人壽六萬歲時迦羅迦村馱佛本生城也  
〈城の南行くこと五十余里で故城に至る。窣堵波あり。賢劫中の人寿六万歳の時に迦羅迦村馱仏が誕生された城なり。〉

城南不遠有窣堵波 成正覺已見父之處  
〈城の南、遠からざる所に窣堵波あり。正覺を成され父に見会われた処なり。〉

城東南窣堵波有彼如來遺身舍利 前建石柱 高三十餘尺 上刻師子之像 傍記寂滅之事  
無憂王建焉  
〈城の東南の窣堵波にはかの如來の遺身舍利あり。前に石柱あり。高さ三十余尺なり。上に師子の像が刻まれ、傍に寂滅の事跡が記され、無憂王が建てたものである。〉

迦羅迦村馱佛城東北行三十餘里至故大城 中有窣堵波 是賢劫中人壽四萬歲時迦諾迦牟尼佛本生城也 東北不遠有窣堵波 成正覺已度父之處 次北窣堵波 有彼如來遺身舍利 前建石柱 高二十餘尺 上刻師子之像 傍記寂滅之事 無憂王建也  
〈迦羅迦村馱仏城から東北へ行くこと三十余里で古い大城に至る。中に窣堵波あり。これ賢劫中の人寿四万歳の時に迦那迦牟尼仏が本生された城なり。東北の遠からざる所に窣堵波あり、正覺を成されて父を度された処なり。ついで北に窣堵波がある。かの如來の遺身舍利があり、前に石柱が建てられ高さ二十余尺なり。上に師子の像を刻し、傍に寂滅の事跡を記す。無憂王が建てたものなり。〉

城東北四十餘里有窣堵波 是太子坐樹陰觀耕田  
〈城の東北四十余里に窣堵波あり。これ太子が樹陰に坐り耕田を觀覽した処なり。〉

大城西北有數百千窣堵波 釋種誅死處也 毘盧釋迦王既克諸釋 虜其族類得九千九百九十萬人 並從殺戮  
〈大城西北に数百千の窣堵波あり。釈迦族種が誅死した処なり。毗盧釈迦王すでに諸釈迦族に勝ち、捕虜とした釈迦族九千九百九十万人。ならびよりて殺戮せん。〉

誅釋西南有四小窣堵波 四釋種拒軍處  
〈釈迦族を誅殺した西南に四つの小窣堵波あり。四人の釈迦族が軍勢を拒んだ処なり。〉

城南三四里尼拘律樹林有窣堵波 無憂王建也 釋迦如來成正覺已 還國見父王爲說法處  
〈城の南、三・四里の尼拘律樹林に窣堵波あり。無憂王が建てたるなり。釈迦如來が已に正覺を成され、國に帰り父王に見まわれ説法をされた處なり。〉

其側不遠有窣堵波 是如來於大樹下東面而坐 受姨母金縷袈裟 次此窣堵波 是如來於  
此度八王子及五百釋種

〈その側、遠からざる所に窣堵波あり。如來この大樹下に東面して坐し、叔母より金縷の袈裟を受け、この次の窣堵波は、如來がここにて八王子と五百人の釈迦族を得度した處なり。〉

城東門内路左有窣堵波 昔一切義成太子 於此習諸技藝 門外有自在天祠 祠中石天像  
危然起勢

〈城東門内の路の左に窣堵波あり。昔、一切義成太子がここにおいて諸技芸を習われ、門外に自在天祠あり。祠中の石の天の像が毅然として立つ。〉

從此東南三十餘里有小窣堵波 其側有泉 泉流澄鏡

〈ここより東南三十余里に小窣堵波あり。その側に泉あり。泉流は鏡のごとく澄む。〉

箭泉東北行八九十里至臘伐尼林 有釋種浴池 澄清皎鏡雜華彌漫 其北二十四五歩有無  
憂華樹 今已枯悴 菩薩誕靈之處

〈箭泉より東北へ行くこと八・九十里、臘伐尼林に至る。釈迦族が沐浴する池あり。清く鏡のごとく澄み、種々の花が咲き乱れる。その北二十四・五歩に無憂華樹あり。今すでに枯悴せり。菩薩降誕の處なり。〉

四天王捧太子窣堵波側不遠有大石柱 上作馬像 無憂王之所建也

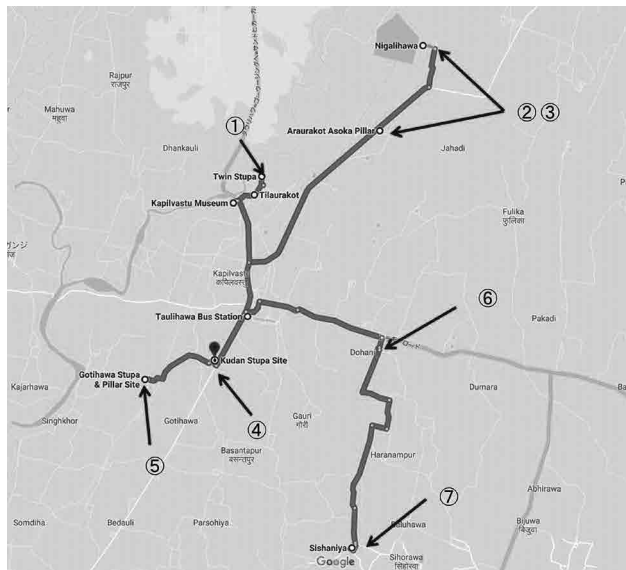
〈四天王捧太子の窣堵波の側、遠からざる所に大きな石柱がある。上に馬の像が作ってあり、無憂王が建てたものである。〉

このように、『大唐西域記』ではカピラヴァストゥの当時の状況、特に建造物や遺物の位置・内容が詳細に記されている。『法顕伝』との合致をみる部分も多く見られ、当時のカピラヴァストゥ領内の仏塔や城、アショカ・ピラの位置関係・配置などを知る上で重要な史料である。ヨーロッパの先学達も当然ながらこの史料をもとに発掘調査を行い論拠を説いているところである。特にルンビニーやサガルハワ、ニガリ・サガルなどの遺跡の位置関係、アショ

カ・ピラの位置関係などから見えてくるのは、広義のカピラヴァストゥと狭義のカピラヴァストゥが混在して取り扱われている点である。

広義のカピラヴァストゥとは国としての存在であり広い地域を指すものである。狭義のカピラヴァストゥは首都あるいは首城としてのあり方である。ドイツの A. Fuhrer などは前者のカピラヴァストゥであり、インドの P. C. Mukherji などは後者の考え方も言えよう。

いずれにしても釈尊が29歳まですごし、四門出遊（出家動機）をおこなった釈迦族の居城は存在したのであり、これを紐解くことは仏教史上のおおきな課題であることに違いはない。



ティラウラコット周辺遺跡図（Google Map より作成）

- ① Twin Stupa 浄飯王と摩耶夫人を埋葬した跡と比定。
- ② Nigali Sagar /Nigalihawa 過去仏であるカナカムニ仏（Kanakamuni buddha）俱那含牟尼仏生誕の地。
- ③ Araurakot Asoka Pillar カナカムニ仏の生誕地として奉納したアショカ・ピラが現存。
- ④ Kudan Stupa ニグローダ樹園の跡地とされる僧院跡。
- ⑤ Gotihawa Stupa & Pillar Site 過去仏であるクラクチャングダ仏（Krakucchanda）俱留孫仏の生誕と入滅が伝えられる地。奉納されたアショカ・ピラが現存する。
- ⑥ Dohani 近年発掘調査（2016～）が進められている古代都市遺構跡。
- ⑦ Shishaniya The Ancient City 近年発掘調査（2016～）が進められている古代都市遺構跡、ストウパと比定される小さな丘を発見。

### 3. ティラウラコットの近年の考古学調査

#### 3-1 ティラウラコットならびに周辺の発掘

1997年に世界遺産登録されたルンビニーを中心とした発掘調査が行われた。1992-1995年に全日本仏教会の主任研究者であった上坂悟を中心にマヤ堂の発掘調査が進められ、アショ

カ以前のマヤ堂の存在、木材フェンスを有する祠堂、釈尊出生地を特定する印石 (Maker stone) の発見など多大な成果を上げた。これに付随して UNESCO、JFIT 主導による “Strengthening Conservation and Management of Lumbini, the Birthplace of the Lord Buddha, Phase1” が2010-13年におこなわれ、2014年から Phase2と題した総合プロジェクトの中で、ティラウラコットの考古学調査も第二期段階での3年計画が進められてきた。責任者はイギリスのダラム大学 (Durham University) の Robin Coningham と前ネパール考古局長の Kosh Prasad Acharya である。

Robin Coningham はティラウラコットに関して1997年には既にネパールの遺跡調査の報告書を出しており、近年のプロジェクトの成果は順次公刊されている<sup>(16)</sup>。

このプロジェクトにはネパール考古局ならびに世界遺産に伴うルンビニー開発トラストや外国研究機関から多くの学者や研究者・大学院生が参加し、発掘が精力的に行われている。パキスタン・バングラディシュ・スリランカ・タイ・日本などから発掘調査隊が派遣され、共同発掘作業にあっている。

Covid-19の影響で2020年の調査が行えない状態であり、現在の発掘調査の報告書はまだ刊行されていないが、ティラウラコットのこれまでの研究成果を見直すべき歴史的・考古学的新所見がだされているので3-2、3-3で紹介する。

### 3-2 調査方法と年代推定

上記プロジェクトの Phase2に入る予備調査が2012年に行われティラウラコットの南側100mに鉄の精製所跡と考えられる場所の鉄のスラブ・マウントを試掘し、炭素測定の結果、鉄の生産活動が営まれていた時代を B.C.4C まで遡ることが出来た<sup>(18)</sup>。

2013年には Debala Mitra が北側城壁部分を発掘し、これまでこのエリアでの居住跡はないとされてきたが、城壁の煉瓦層下から柱を立てる柱跡が発見され、城壁年代から考えて B.C.6C まで遡ることができるものとし、ティラウラコットもこの頃造営されたと考えられる。

2014~16年の調査では中央に沐浴池の構造を持つ貯水池の発掘により、使用開始時がマウリヤ朝期と考えられている。

さらに北側のサマイ・マイ堂の北側の発掘では柱跡などが発見され、2019年には城壁との間に僧院または祠堂・神殿跡と見られる巨大な遺構が発見された。

この2019年の調査では、ティラウラコットならびにその周辺域で磁気探査が積極的に導入され、東門外側の通称カクタカ・ストゥーパと称される仏塔マウントの南側に250m×100m規模の僧院跡が発見された。これは上述の『大唐西域記』の記述の三千人の僧がいた僧院跡と見ることもできる。

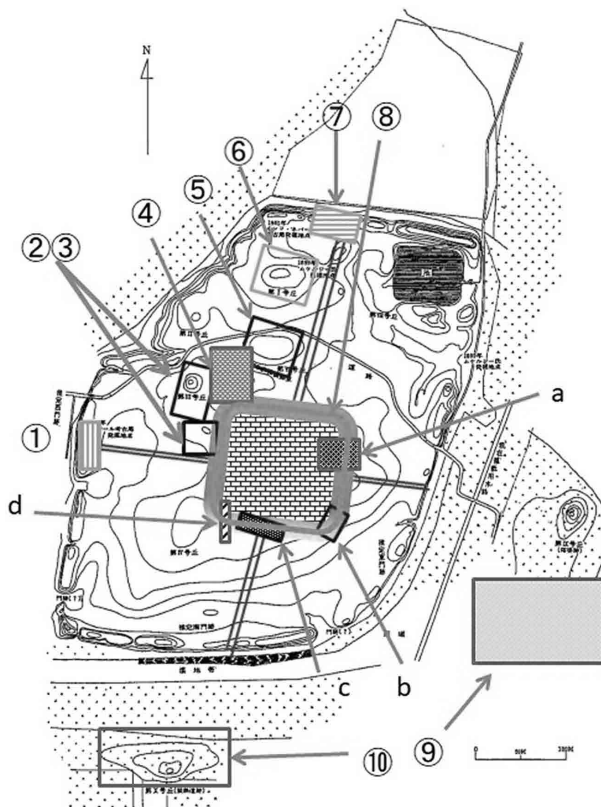


また、この僧院の南端からはテラコッタ壺が発見され、中から497枚のシルバーパーンチマークコインが出土し、その分類ならびに年代特定を現在待っているところである。

因みに、筆者が坂詰秀一から所在調査依頼をされていた立正大学発掘のシルバーパーンチマークコインは現在所在不明である。これは1973年の立正大発掘調査で出土したもので、32枚のコインのうち、マウリヤ朝以前9枚、マウリヤ朝期（B.C.325～185頃）15枚、シュンガ朝期（B.C.185～73）8枚、他の14枚銅貨はクシャン朝期（A.D.1～2C）のものである。2019年の筆者の調査の折のネパール考古局の説明では、考古局本部が火災により全焼し、その折り当該コインやその他の出土文物も消失したとの回答であった。

### 3-3 上記プロジェクト Phase2のティラウラコット発掘調査による新所見

立正大調査隊が作成したティラウラコット構図面をもとに、現在の発掘状況と新所見部分を重ねて作図し現状と新所見を考察する。



ティラウラコット遺跡の概要  
(注(2) Vol.1 P66. Fig.7より作成)

- ①西門
- ②Ⅲ号丘(商店跡)
- ③Ⅲ号丘(住居跡)
- ④沐浴池
- ⑤Ⅶ号丘(立正隊発掘)
- ⑥Ⅰ号丘(新寺院or神殿)
- ⑦北門城壁跡
- ⑧V～VIで一つの王宮跡
  - a住居
  - b王宮壁
  - c王宮南門
  - d南西トレンチ箇所
- ⑨カンタカストウーパ南僧院跡
- ⑩製鉄所跡(鉄鋼スラグ出土)

- A. 東西・南北にメイン道路が整備されている。この道路は王宮の内部も十字に横断している。
- B. ①西門から東門へ真っ直ぐ道路が整備されているならば、これまで東門跡と推定されていた部分は本来の東門から外れていることとなる。
- C. ②③のⅢ・Ⅳ号丘には商店や住居跡が発見された。
- D. ④は元来、池と考えられていたが、沐浴池の構造を持った貯水池。
- E. ⑤Ⅶ号丘は立正大学が発掘した居住スペースの場所である。
- F. ⑥Ⅰ号丘はサマイ・マイ堂の北側に位置し、北壁との間。上述の通り柱跡や僧院または寺院・神殿などの祠堂跡と見られる巨大な遺構を発見。
- G. ⑦北門の発掘ならびに北側城壁を発掘し、城壁煉瓦層下部より柱跡が発見。城壁はB.C.6 C頃のものとして推測でき、このころからティラウラコットの城塞化が始まったとする。
- H. ⑧Ⅴ号丘・Ⅵ号丘は王宮である。磁気探査調査をもとに四方を壁で囲まれた王宮の存在が明らかとなり、1.5m幅の煉瓦壁で囲まれ、南門の部分からも続いている煉瓦壁が発見されている。



王宮南東部の城壁 b (筆者撮影)



王宮南門に続く城壁 d (筆者撮影)

- I. ⑨俗称カンタカ・ストウパ南側に南北250m東西100mの僧院跡を新たに発掘。  
J. ⑩鉄の精製所跡と考えられる場所の鉄のスラブ・マウントを試掘し、鉄の生産活動が営まれていた時代をB.C.4Cまで遡ることが出来た。  
以上が発掘による主な新所見といえよう。

#### 4. 発掘ベースキャンプ・シャンティビハーラ

この一連のプロジェクトによる発掘調査のベースキャンプとなっているのは立正院シャンティビハーラである。このシャンティビハーラは法華宗村上東俊の師父村上日源が、ティラウラコットに仏教寺院が無いことを嘆き、Risshoin Shanti Vihar Trust (ネパール現地法人)を設立して仏跡護持のために発起発案した寺院である。

本ビハーラの初代法人会長には、元ビレンドラ国王第一秘書兼初代ルンビニー開発トラスト会長のローク・ダルジャンが就任し、当時はネパール政府公認の一大事業であった。

しかし1995年2月の本ビハールの上棟式後、4月に日源が突然遷化。その意思を東俊が引き継ぐこととなる。この惨劇から2年後の1997年、法華宗陣門流総本山本成寺八十六世・鈴木日艸が初代住職として就任し、3月によりやくシャンティビハーラの入仏落慶大法要を営むこととなる。1998年12月には中村瑞隆も本ビハールを訪れ、翌1999年4月に村上東俊がシャンティビハールの住職に就任した。

2014年1月より上述の“Strengthening Conservation and Management of Lumbini, the Birthplace of the Lord Buddha, Phase2”プロジェクトよりティラウラコット発掘調査のベースキャンプにとの要請があり、以後、本ビハールはティラウラコットの発掘の拠点として、Robin Coningham やダラム大学研究者、ネパール考古局、世界各国の発掘調査団の受け入れ、宿泊、バックアップ機関として精力的に活躍してきた。村上東俊も積極的に関わり、その成果を学会等で公表している<sup>(19)</sup>。

しかしこのシャンティビハーラは現在、ネパール政府の世界遺産登録に向けた公園化事業計画の中で存続の危機に瀕している。これまで無償で全日本仏教会のマヤ堂マーキングストーン発見やルンビニー世界遺産登録の発掘拠点として、その足がかりを作ってきた本シャンティビハーラが、政治的思惑の見え隠れする中で接收されようとしているのである。海外で調査研究する外国機関の活動の難しさを考えさせられる事案である。

#### 5. ティラウラコットの課題

2018年2月にルンビニーで開催された“International Scientific Committee”の国際会議で方向性が示され、ティラウラコットの世界遺産登録に向けてさらに発掘調査を進める方針で

調整が進められている。この会議には地震後のネパール世界遺産暫定リストの策定に関わった日本の都市工学・都市環境の専門家やネパール日本大使館などが関わっており、各国仏教者や研究者と共に今後のティラウラコットの発掘や世界遺産登録に向けて JFIT など日本政府も大いに関わっていく姿勢が示されている。

ティラウラコットの発掘調査を困難にしているものに、同一箇所にも幾層にも重なり合った遺跡の存在がある。現在クシャン朝期までは掘り下げているが、釈尊在世期、その後のマウリヤ朝期の層に至るには、現在の遺構を取り払い更に下方部分へ掘り下げなければならず、遺跡保存の観点と釈尊在世時の遺構にまでたどり着けるかという境界で地道な発掘作業が続けられている。拠点であるシャンティビハーラの存続が危ぶまれるが、UNESCO、JFIT のもと進められているティラウラコットの発掘調査を日本の学界ならびに立正大学、仏教界がどのように関わりを持って取り組むかという大きな課題も浮き彫りになっている。

## 注

- (1) 中村瑞隆・久保常晴・坂詰秀一『ティラウラコット 本文編—立正大学ネパール考古学調査報告』雄山閣出版, 2001.  
1966年 予備調査・1967年 第一次調査～1977年第八次調査・1980年 補足調査が行われた。
- (2) 中村瑞隆・久保常晴・坂詰秀一“TILAKOTA” Vol.1～2, YUZANKAKU, Japan, 1978.
- (3) A.Fuhrer “Antiquities of Buddha Sakyamuni’s birth-place in Nepalese tarai” Simla:Archaeological Survey of India Vol. VI. 897.
- (4) L.A.Waddell “The Discovery of the Birthplace of the Buddha” *Journal of the Royal Asiatic Society*, Vol.29, 1897, pp.644-651.
- (5) P.C.Mukherji “A report on a tour of exploration of the Antiquities in the Terai, Nepal, the Region of Kapilavasutu, during February and March 1899” Simla:Archaeological survey of northern India Vol.XXVI. 1901
- (6) Vincent A.Smith “A report on a tour of exploration of the Antiquities in the Terai, Nepal, the Region of Kapilavasutu, during February and March 1899” Calcutta:Office of the Superintendent of Government Printing 1901.
- (7) W.Vost “Identification in the Region of Kapilavastu” Cambridge University Press 1906.
- (8) 岡教遂「迦維羅衛城址考」『大崎学報』46号 1917.
- (9) Devala Mitra “Excavations at Tilaurakot and Kodan and the Exploration in the Nepalese Tarai” Kathmandu: The Department of Archaeology. 1972.
- (10) T. N. Mishra “Tilaurakot Excavations (2023-2029)” *Ancient Nepal*. 41-42.
- (11) B. K. Rijal “Excavations and other archaeological activities in Tilaurakot” *Ancient Nepal*. 26.
- (12) K. M. Srivastava “Indian Archaeology A review, 1978-1979” Archaeological Survey of India, 1981.
- (13) 中村瑞隆『釈迦の故城を探る—推定カピラ城跡の発掘—』雄山閣, 2000, pp.36-42.
- (14) 『法顕伝』大正 51 : pp.861a-861b.
- (15) 『大唐西域記』大正 51 : pp.900c-902b.
- (16) Coningham, R.A.E. & Schmidt, A., *Nomination of Tilaurakot and Ramagrama as part of a*

*serial nomination of World Heritage Sites associated with the life of the Lord Buddha*. Non-destructive archaeological investigations. Paris: UNESCO. 997.

- (17) Coningham, R.A.E., Acharya, K.P., Schmidt, A. & Bidari, B. (2010). *Searching for Kapilavastu*. In *Essays in Archaeology*. Gunawardhana, P., Adikari, G. & Coningham, R.A.E. Colombo: Neptune Publishers. 55-66.

Coningham, R.A.E. , Kosh Prasad Acharya, Mark Manuel, Christopher Davis, and RAM Bahadur Kunwar. “*Excavating, Conserving and Presenting Tilayrakot-Kapilavastu*” (UNESCO Tentative World Heritage Site) September 2018.

- (18) Strickland, K.M.et al. 2016 “Recent Excavation at Tilaurakot’s Southern Industrial Mound:A preliminary Report.” *Ancient Nepal*. 190:47-5.
- (19) 村上東俊「ティラウラコットにおける近年の考古学調査について」『印度學仏教學研究』65-1, pp.283-288.